

「協創」が導くBIMの未来



ラウンドテーブル參加企業

梓設計
久米設計
安藤ハザマ
戸田建設
西松建設
三井住友建設
船場
SUGIKO
文化シャッター

発注者メリット感じてもらうために



社21人が参加

データ循環のルール化

協倉

知見合せ解決策導く
「じつすればBIM

建設業を良くすることができるか」。PLUS・1の高木氏はラウンドテーブル参加者に向けて、そう呼び掛けた。同社が展開する「協創」によるBIMコンサルティングは、要求が多様化する中で、高度な専門性をもつ者同士の連携によって課題解決をしていく考え方だ。協創相手は同業のBIMコンサル会社だけでなく、設計事務所やゼネコンなどの依頼主側も含めており、「お互いの知見を合わせることでより高度な課題解決策を導き出す」と思いを込める。

「BIMデータが最終的に誰のものなかを突き詰めると、発注者も含めて考えるべき」と三井住友建設の原田氏は焦点を絞り込む。梓設計の松澤氏も「最終的に発注者がBIMのメリットを感じてもらうことに行き着く」とし、設計段階から施工段階を経て、完成後の維持管理まで「BIMモデルがつながる流れを確立する」重要性を説く。

「BIMデータが最終的に誰のものなかを突き詰めると、発注者も含めて考えるべき」と三井住友建設の原田氏は焦点を絞り込む。梓設計の松澤氏も「最終的に発注者がBIMのメリットを感じてもらうことに行き着く」とし、設計段階から施工段階を経て、完成後の維持管理まで「BIMモデルがつながる流れを確立する」重要性を説く。

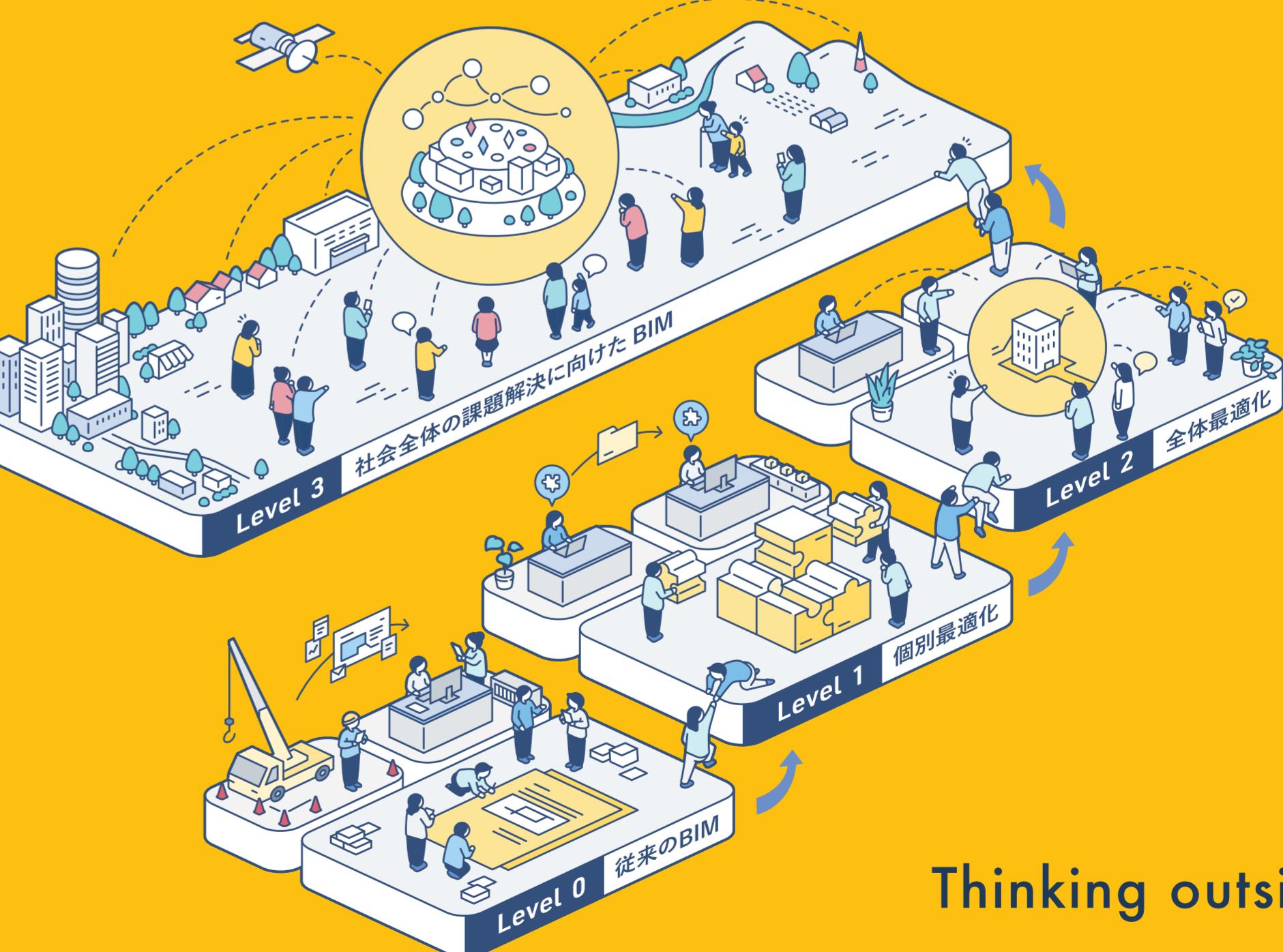
協創

Mを活用する上で「様々なテンプレートやールで作られたBIMの属性情報をデータとして後工程にスムーズに引き継いでいくことが重要にならんだろう」と考えている。戸田建設の荒木氏もデータをつなぐ視点から「コード連携の必要性」を強調する。

データ流通の統一化は他の分野からも賛同の声があがる。文化シャッターの三森氏は「図面を書かなくてもBIMから製品の製造工程にデータを引き継ぐ流れが実現する」とし、SUGIKOの高橋理恵子技術営業部技術営業部次長は「BIMを活用するメリットがいかに見いだせるか、それをゼネコンと共通認識としてもつことができるかが重要」と説明する。

船場の大倉氏もデータ連携については「建材メーカーなどと最重要テーマに位置付け、日々議論をしている」と語る。データ連携を突き詰める上で、BIMの過剰な属性情報をそぎ落とす「断捨離」の試みを呼び掛ける久米設計の古川氏は「建設業界の各分野が最低限必要な情報は何かを一度立ち止まって考えてみることが、データ連携の近道になるかもしない」と付け加える。

「BIMを架け橋」として、既成概念を超えた「協創」を推進する。



Thinking outside the bim

規制にならない枠組みとは

顧客やパートナーとの「協創」によって最適解を導くBIMコンサルティングを展開するPLUS.1（東京都千代田区、高木英一CEO）が創立1周年を記念してディスカッションイベント「BIM-PLUS.1ラウンドテーブル2025」を開いた。参加したのは各分野でBIMを先導する梓設計、久米設計、安藤ハザマ、戸田建設、西松建設、三井住友建設、船場、杉孝（SUGIKO）、文化シヤッターのBIM推進担当21人。冒頭、高木CEOは「BIMデータが各業界を越えてつながり、様々な課題を解決する。各分野の専門家が課題解決に向けて連携する協創の流れを大きなムーブメントにしていきたい」と強く語った。議論のテーマは「BIM推進」「標準化」「協創」の3つ。ラウンドテーブルを通して日本のBIMの進むべき方向性を探る。

BIM推進

普及へ業務課題を共有

顧客やパートナーとの「協創」によって最適解を導くBIMコンサルティングを展開するPLUS.1（東京都千代田区、高木英一CEO）が創立1周年を記念してディスカッションイベント「BIM-PLUS.1ラウンドテーブル2025」を開いた。参加したのは各分野でBIMを先導する梓設計、久米設計、安藤ハザマ、戸田建設、西松建設、三井住友建設、船場、杉孝（SUGIKO）、文化シヤッターのBIM推進担当21人。冒頭、高木CEOは「BIMデータが各業界を越えてつながり、様々な課題を解決する。各分野の専門家が課題解決に向けて連携する協創の流れを大きなムーブメントにしていきたい」と強く語った。議論のテーマは「BIM推進」「標準化」「協創」の3つ。ラウンドテーブルを通して日本のBIMの進むべき方向性を探る。

普及へ業務課題を共有

BIM推進

では社を挙げてBIMに入り踏み切る動きがになっている。多くの業界がBIMの推進部署を置き、そこを軸に社内を図っている。ラドテーブルには9社の推進役の21人が参った。PLUS・1のは「BIM普及に向けて取り組んでいきの課題を共有することで、普及に向べき方向性を導きたい」と呼び掛け

本質的な活用の意識改革を促す

BIM確認申請が普及の追い風